

氏名	田口智子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第145号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉ショスタコーヴィチ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》(Op. 29) と《カテリーナ・イズマイロヴァ》(Op. 114) －作品成立と声楽家の視点における二つの作品の比較－

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	朝倉蒼生
(演奏審査主査)	〃	〃	( 〃 )	朝倉蒼生
(演奏審査副査)	〃	〃	( 〃 )	伊原直子
( 〃 )	〃	〃	( 〃 )	成田英明
( 〃 )	〃	准教授	( 〃 )	佐々木典子
( 〃 )	〃	非常勤講師	( 〃 )	一柳富美子
( 〃 )	〃	非常勤講師	( 〃 )	マルチェラ・レアール
(論文審査主査)	〃	教授	( 〃 )	朝倉蒼生
(論文審査副査)	〃	〃	( 〃 )	伊原直子
( 〃 )	〃	〃	( 〃 )	成田英明
( 〃 )	〃	准教授	( 〃 )	佐々木典子
( 〃 )	〃	非常勤講師	( 〃 )	一柳富美子

(論文内容の要旨)

ドミートリイ・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ(1906-75)がスターリン政権のソヴィエトを代表する作曲家として生き抜き、後世に名を残す活躍したことは有名な事実である。彼は交響曲や弦楽四重奏などで名が知られているが、ソヴィエトで上演禁止を受け、あまり世に出る機会のなかったオペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》がある。その上演禁止令は、ショスタコーヴィチの音楽を「形式主義」と批判し、スターリンの大粛清が始まる前に、他のソヴィエト作曲家への見せしめの意味もあった。こうして、それまでソヴィエト連邦だけに留まらず世界各地で人気を博していたオペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》(Op. 29)は闇へ葬り去られた。それから20年近く経って、ショスタコーヴィチはこのオペラの改訂版《カテリーナ・イズマイロヴァ》(Op. 114)を作曲し、作品番号も変えて発表したのである。

しかし、ソヴィエト政府がこの才能溢れる、ソヴィエトのホープの作品を非難したのは、その作品自体にそれなりの原因があった。そのオペラの内容は当時にすればきわどいものを含んでいたのだ。レスコフ原作の小説は、商人の妻カテリーナ・イズマイロヴァを主人公とする殺人劇だけでなく、性的描写を多く含むものであった。しかし、ショスタコーヴィチはオペラとして生まれ変わったカテリーナを、ただの殺人鬼ではなく、人の同情を集め、その罪を犯したことに対してさえ正当性を与えるようにキャラクターを変えて描いた。その作曲家の意図するところは何だったのだろうか。一体ショスタコーヴィチが求めた主役のカテリーナ像はどうであったのか。そして、それを守るために《カテリーナ・イズマイロヴァ》ではどのような修正を行なったのか。歌手としてどのようにカテリーナ像を探れるのかを考えた。

そこで本論では、まず第1章で《ムツェンスク郡のマクベス夫人》および《カテリーナ・イズマイロヴァ》成立の背景を調べ、第2章ではショスタコーヴィチが主役のカテリーナにどのような女性像を求めていたのか、ショスタコーヴィチがレスコーフ原作の小説を変えて独自のカテリーナを生み出した理由を調べた。また、最終章では表現者にとって重要な歌詞、音楽の変化の経過を観察して、声楽家の視点からの二つの作品の相違点、声楽的問題点について考察した。

ショスタコーヴィチを政治的な側面から、または学術的な側面から研究したものは数多いが、本論はあくまでも声楽家が役キャラクターを探るとき、そして修正が加えられた歌詞や音楽にはどのような経過があったのかを知り演奏の際に役立てればと思って書いた。

#### (博士論文審査結果の要旨)

本論文の題目は『ショスタコーヴィチ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》Op. 29と《カテリーナ・イズマイロヴァ》Op. 114—作品成立と声楽家の視点における二つの作品の比較—』である。

声楽家の視点でみた両作品の比較を試みている。1932年に作曲され、1934年に初演されたオペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》は当時の聴衆から非常に好意的に受け入れられていたにもかかわらず、スターリン時代の粛正による政治的な理由で上演禁止となった。スターリンの死後、かなりの年月を経て作品番号もタイトルも変えて出版された改訂版《カテリーナ・イズマイロヴァ》では粗野で下品な台詞や音楽的に猥雑な部分を書き換え柔らかい表現に直した。またバスのパート（ボリス役）とカテリーナのパートに現れる発声的負担の多い高音の連続する部分も改善されたことなど、2つの作品の異なる箇所を譜例で示しながら比較し、演奏家としての演奏解釈を加えて述べられている。改訂版《カテリーナ・イズマイロヴァ》では声の負担は軽くなったものの、その感動や喜びも修正されて幾分少なくなってしまうと申請者は述べている。

「現代のオペラ、特にヨーロッパにおいては伝統的な物より斬新な演出や表現が優遇される傾向にある。初版では初演当時から性的で猥雑な部分ばかりが目されたが、これは作曲家が望むものではなかった。彼が求めたカテリーナ像を探っていく事は歌手として終わりの無い探求である。」と締めくくっている。作曲家の真に意図した物を再現し演奏していく事こそ演奏家のあるべき姿であろう。今回の演奏も初演版で行われたが下品で猥雑な部分は的確に表現され、カテリーナの心情がよく表現され秀逸であった。

オペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》は以下の4つの版が存在するが、2007年に出版されたスコアについて言及していないので、新しい楽譜をもとに今後、より踏み込んだ研究が望まれる。

1932年版 シコルスキ版（初版 ムツェンスク郡のマクベス夫人）

1935年版 ムズギズ版（ショスタコーヴィチによるピアノ編曲譜）

1963年版 ムズィーカ版（カテリーナ・イズマイロヴァとして出版された改訂版）

2007年版が存在する。

巻末に初演版のスコアの申請者による訳詞と改訂版の訳詞（初演版との相違部分）が載せられていて、このオペラをこれから演じる人たちにとって大きな助けになるであろう。

以上演奏家の論文として後に続く人たちにその道を示す事ができるもので学位を授与するにふさわしいと考え合格とする。

#### (演奏審査結果の要旨)

ショスタコーヴィチ作曲《ムツェンスク郡のマクベス夫人》作品29が、次の場面をカットして全幕上演された。1幕2場のアクシーニャの輪姦、2幕5場の司祭登場、3幕7場の警察署の場面、3幕8場

の挙式中の逮捕シーン。

学位申請者は主演の他に、演出、装置デザイン、衣装製作、他の5人のキャストのロシア語コーチまでを一人でこなした。ピアノ伴奏により簡素なステージで演奏された。白い大きな布を舞台奥から前へ張り、舞台奥に階段を5段置いただけの装置で全幕上演され、見事な場面状況を作り出していた。白い布が部屋のしきりや、家の壁、時にはベッド（シート）、最後の幕では湖（波）として使われ、象徴的で優れたアイデアである。

第1回、第2回の博士リサイタルで演奏してきたショスタコーヴィチの作品の集大成ともいえる演奏で、音楽、演技ともに役のキャラクター全てが自分のものとして表現されており、叙情性とドラマティックな部分を余すところ無く発揮され、すばらしい歌唱と演技であった。中低音の声の艶と情感の表現は特筆に値する。ロシア語の歌曲とオペラは学位申請者の声に合わせており、特にカテリーナ役は日本ではこれ以上の歌手は望めないであろうと思わせる程である。短い日本滞在で大道具、小道具の調達、衣装製作、演出等でコンディションを維持するのが困難なのではと懸念されたが疲れを感じさせない力強い歌唱であった。感情的になりすぎて高音域でのコントロールが難しいと感じられた部分が僅かに見られたが、今後は発声のテクニックと感情のコントロールのバランスを考えることも必要であろう。ロシア語の台詞は外国人としては突出している。プロフェッショナルの歌手としてヨーロッパで多くの舞台を経験している事がうなずける非常に高いレベルの演奏であった。

以上の理由により博士の学位を授与するのに十分と考え合格とする。